

都市住民による農作物栽培を活かした
住宅地内空閑地のマネジメント手法の提案

研究代表者 栗田 英治 ((独) 農研機構 農村工学研究所
農村環境部 景域整備研究室 主任研究員)
共同研究者 寺田 徹 (日本学術振興会特別研究員DC,
東京大学大学院 新領域創成科学研究科)
連携・協力 新保奈穂美 (東京大学大学院 新領域創成科学研究科)

[研究報告要旨]

人口減少や都市の縮退にともない、都市郊外部においては、増加する住宅地内空閑地の管理が課題となっている。一方で、同地域では、高齢者を中心とした都市住民による農作物栽培を通じた未利用地の管理・活用が広がっている。

本調査研究では、都市住民による農作物栽培を取り上げ、そうした活動を活かした住宅地内空閑地のマネジメント手法を提案することを目的とした。具体的には、空中写真判読等にもとづく空閑地の分布と、空閑地を含む住宅地の属性を明らかにし、空閑地の活用の観点からみた住宅地のタイプ分けを実施した。一方で、都市住民の参画によって実施されている農作物栽培のパターンの整理を行った。両者の結果を組み合わせることにより、複数の都市住民による農作物栽培を活かした空閑地のマネジメント手法を提案した。

埼玉県北本市を調査対象に設定し、市内に立地する940の空閑地を抽出した。空閑地を含む住宅地の属性については、町丁目に着目し、社会的な特徴として住民の年齢別人口構成、土地的な特徴として農地の占める割合を明らかにした。結果、主体の面で「高齢者中心」、「全世代」、活用する土地の面で「農地連携」、「空閑地単独」の組み合わせからなる4つの空閑地の活用の観点からみた住宅地タイプを得た。

都市住民による農作物栽培のパターンについては、日本国内の市民農園を中心とした取り組み、オーストリア・ウィーン市におけるクラインガルテン政策に着目し、両者の運営・管理上の特徴を整理した。市民農園では、農園利用方式による利用者組織を有する市民農園の運営・管理のあり方が、住宅地内の空閑地をマネジメントしていく上で有効であることが示唆された。クラインガルテンでは、都市住民のもつ多様なニーズを許容する一方で管理の徹底を実現する、体系だった法整備および組織整備が、住宅地内の空閑地マネジメントに有効であることが示唆された。